

ヒロイン  
冴えない彼女の育てかた

丸戸史明

---



ファンタジア文庫

1928

## 目次

### プロローグ

第一章 フラグってさ、気づいてあげないと折れてしまうんだ

第二章 地味キャラだって、れっきとした個性<sup>ごうせい</sup>だろ

第三章 はじめに、神はテンプレを創造された（前編）

第四章 はじめに、神はテンプレを創造された（後編）

第五章 どうせ私は、誘<sup>まき</sup>い受けの女

第六章 八月三十一日の男 #自覚のあるクリエイターはRT

### エピローグ

あとがき

## プロローグ

「舞台は東京から飛行機で一時間くらい南の離れ小島でさ……」

放課後の教室は、斜めから差し込む夕陽で赤く寂しく輝いている。

「で、その島の学園が過疎化のせいで本土の名門女学校と統合されることになるんだけど……」

窓の外から、運動部の連中の無駄に空元気な声が届く。

「そんなわけで、主人公は女装してその女学校に通うところからストーリーは始まるって感じで……」

その、僅かな音が聞こえるせいで余計に静かに思える空間に、俺の音が響く。

「そんな主人公のもとに、月から王女様がホームステイでやってきて……」

俺の、熱を持った強い想いとともに、静かに拡散する。

「言い忘れたけど、この世界では『神界』と『魔界』と『人間界』が共存して……」  
「ねえ……」

「あと、技術も進歩してて、主人公の家にはメイドロボが三体もいるんだけど……」

「あのさ……」

「そんな中、主人公は自分の部活を守るために生徒会選挙に出ることを決意して……」

「ちよつと……」

「あ、ついでにヒロインには全員に一つずつ得意な武術があつて……」

「いい加減黙れえええ〜!!!」

「うわそんな大きな声出すなよ。周りに迷惑だろうが」

俺の、噛んで含めるような静かで重い言葉たちが、いきなりの理不尽で暴力的な大声によつてかき消される。

「大音響で意味不明な夢物語を三〇分以上ノンストップで教室中に響かせてた口が迷惑とかそゆこと言う!？」

「そんなに経つてたか……」

時計を見ると、確かにさつきと比べて短針が一五度くらい動いているような気がする。

あ、俺、物事を大局的に捉える人間だから長針の動きには興味ないんで。

「とにかくもう帰る。まるつきり、これ以上なく、完全無欠に無駄な時間だった……」

「いや、ちよつと待てよ、少し落ち着け。まだ話は……」

「いきなり何の前触れもなく放課後に呼び出されたかと思つたら、こんな表紙だけの企画

書見せられて、意味不明な演説聞かされて、ついでに理解不能なサークル勧誘までされるなんて、そりゃプチ切れたくもなるわよ」

「いきなり何の前触れもなく放課後に呼び出したのこのこの顔出すくらいだから脈ありだと思つてただけだなあ……」

「つ……色んな意味で後悔つて言葉が頭の中を駆け巡るから冷静にツッコむのやめて」「そう?？」

さつきから目の前でわめき散らしてた女が軽くうつむいて頭を押さえる。

と、そいつの表向きのトレードマークとも言える金色の髪が、さらさらと軽く音を立てて肩からこぼれ落ちる。

その、初対面の男なら間違いない一瞬で目を奪われる、細工物のような金髪に白磁のよな肌。

英国人の父親と日本人の母親を持った日本育ちの同級生。

澤村・スペンサー・英梨々。

「大体あんたね、今迄みたいに消費型オタでいるうちはまだ見逃せてたけど、なんの取り柄もないくせにいきなりゲーム作ろうとか世間なめてんの?」

いつもはお嬢様のように可憐な行動と言動がクラスはもとより学校中で評判の美少女だ

が、一皮むけばこんな癡狂かつ激情的かつマニアックな本性が眠っている。

「自分は何も出来ないくせに適当に人集めてゲーム作らせて一旗揚げようとか、そういうの同人ゴロって言うのよ。あんたの大嫌いな、ね」

「何を言うか！ 俺にはこのたぎる情熱がある！ やる気も人一倍だ！ つまり俺なしにこの企画はあり得ないしゲームだつて完成するはずがない！」

「そりゃ他に誰も作る気ないし」

「あ、文字通り握り潰すな！ せっかく一晩かけて書き上げた企画書なのに……」

「名前と日付と同人ギャルゲー企画（仮）って書くのにどうして一晩かかるのよ」

「一時間寝れば必然的に残った時間はわずかに決まってるんだろ」

「もうどこから突っ込めばいいのよ……このつ、このおっ！」

「あ、ああ……酷い」

一年の時から展覧会に入賞している美術部のエース。

類い希なる画才の持ち主。

そんな風にもてはやされているこの女の正体は、校内では俺を含めたごく一部の人間にしか知られていない。

まあ、それを『俺だけに見せる彼女の別の顔』とか優越感に浸れるほどに俺は人間で

てないけど。酷いよこの女。

「あんたみたいなのが今さら表舞台に立とうなんて一〇年早いだよ」

「今さらなのに早いのかよ。あと同人ギャルゲーって表舞台か？」

「っ……あんたなんか今まで通り美少女アニメ見て買って布教さえしてればいいのよ」

「お、お前それ以上言ったら『自治会の独断』B フルレイディスク D 最終巻回さねえぞ？」

「そうやってラス前まで釣つていて最後にいきなり梯子外したりするからあんたは最低だつて言ってるのよ！」

「い、いや今のは単なる負け惜しみのな脅しだし今までやったことないだろ……」

そんなに楽しみにしてたんだあの作品……

そもそも梯子外すつてポピュラーな喻えかな？

「とにかく、これ以上の議論はしても無駄。あたしは自分のことだけで手一杯なの。とても素人のくだらないお遊びに付き合ってる暇なんかはないの」

「メインヒロインのキャラデザだけでいいんだよ……あと、ついでにほんのちよつとサブヒロインのデザインと全キャラの原画と……サービスで背景込みの塗りと……」

「二次曲線的に依頼内容増やすな！ どのゲスト原稿オンリー誌よ！」

「なんか以前にあったのか……？」

などと、とりつく島もない不毛な議論が巻き起こる教室に……

「落ち着きなさいよ二人とも」

「っ……………」

「せ、先輩……………」

いつからこの教室に二人きりだと錯覚していた……な感じの、少し低めの落ち着いた声  
が俺たち二人の耳を撫でる。

そうだ、今回の企画に声を掛けたのは英梨々だけじゃなかった。

こうやって離脱者が現れる危険を見越して味方を増やしておいた俺の逆転勝利……

「まあ今回のことは、残念ながら私も澤村さんの意見に賛成だけどね」

「せ、先輩い〜」

と思いきや、一方的に有利な方に助け船を出すとか、判官贔屓の日本人的気質はどこに  
行ってしまったんだろう……

「ねえ、倫理君」

「ともやです……………」

ここで俺の名前が出たところでせつかくだから自己紹介。  
あきと倫也。  
安芸倫也。

とよがさき  
豊ヶ崎学園二年生。

あと、昨日からの追加プロフィールとして、同人ギャルゲー制作サークル（名称未定）  
主宰。  
しゅざい。

「あなたの企画書、一通り目を通させてもらったわ」

「そういう嫌味はいいですから。だからわざわざ広げなくていいですから」

先輩は、英梨々が丸めた紙くずを丁寧に広げてシワを伸ばす。

広げた先には、やたらとフォントだけが大きくて文字数の極端に少ないタイトルだけの  
企画書（表紙）が姿を現すことを知っていたながら……

「言い方を変えると、あなたの頭の中身もさっきの三〇分でだいたい理解できたわ」

「すごいっすね、ぶっちゃ俺にはサッパリですよ」

「ええ、何も考えてないけど行き当たりばったりでなんとかなるだろうもう寝よ〜という  
昨夜一〇時頃の布団の中のあなたの思想が理解できたということよ」

「相変わらずさきっついな〜」

「ひらき直るその態度が気に入らないからよ」

会話の流れはあくまで冷静に、でも言葉は選ばず、結構のレベルを超えて毒舌。  
艶のある長い黒髪。ほとんど表情を変えないせいで客観的美女に固定されたその容姿。

俺や英梨々より一年年上の上級生。

霞ヶ丘詩羽。

「とりあえず、口頭で補足したことを含めても、企画としては0点かしら」

「おおう」

「どこかで見たパーツの寄せ集めにしか見えないし」

「うぐう」

「多分、ここ最近プレイした作品をいくつか適当に繋げてるだけなんじゃない？」

「で、でも色んなジャンル適当に繋げたから結構アバンギャルドな内容になってる気が

……」

「そうね、寄せ鍋なべじゃなくて闇鍋やみなべが出来上がるレベルにはね」

「ぬ、ぬふう」

「というか、色んなジャンル適当に繋げたとか開き直るなど言ってるの」

結構のレベルを超えてというか、相当のレベルで毒舌。

激情型の英梨々と違って理性的（に聞こえる）な分だけ余計に刺さる。

「で、でも、この企画は俺にしか……」

「とある編集さんに聞いた話なんだけどね……『自分にしかできない』って言って持って

きた企画がマトモだったためしなんかないんだって」

「え……?」

「これは本当にあつた話らしいんだけど……ある日、とあるゲーム会社に持ち込みの企画書が届いたの。本人の触れ込みによると『今までにない新機軸』とか『これを真にユーザーが待ち望んでいた作品』とか『この企画を実現できるのは業界広しと言えども自分だけ』とか、とにかく自画自賛の羅列られつだね」

「へ、へええええ〜」

やばい、さつき全部言った気がする。

「で、蓋たかを開けてみると『朝起こしに来る世話焼き幼なじみ』がいて、『さっぱり系シロートカットスポーツ少女』がいて、『大人しいけど主人公にべったりな妹』がいて、『霊的れいご存在の謎の少女』がいて、『面白い掛け合い』があって、『付き合ってからイチャラブ描写しや』があって、『終盤しゆうばんの急展開と奇跡せきによる救済』があって……」

「ああ、いいから、もういいから!」

すげえ、その説明だけで瞬時に五つ以上のタイトルが浮かんだ。なんとという新機軸。

「まあ、そういうことね」

俺の三〇分をたった三〇秒で完膚無きまでに叩きのめすと、詩羽先輩はうなだれる俺の

肩にぽんと手を置く。

「倫理君の本気のおタク活動も久しぶりだし、協力してあげたい気持ちもなきにしもあらずとはとても言えないような気がしなくもないわけじゃないんだけど」

「冷静にカウントすると協力したくないと言ってますよね。あと倫也」

一年の時から学年一位を外したこのない学園きつての秀才。

気まぐれで演劇部の脚本も書いていたりする類い希なる文才の持ち主。

そんな風に畏怖されているこの女性の「正体」は、やっぱり校内では俺を含めたごく一部の人間にしか知られていない。

まあ、それを……いや、酷いんだこのひとも。

「ちよつとお……勝手に二人の世界に入ってるんじゃないわよ！」

「お前の周りの世界ってのはいつもこんなに俺に厳しいのかわよ!」

と、横合いから金色の揺れる尻尾とともに、英梨々の鋭い舌鋒が再び突き刺さる。

「あら、まだいたの澤村さん？ とつくに彼のこと見捨てて帰ったかと思つたのに」

「なっ……」

と、どんな本能か知らないけど、詩羽先輩の過剰防衛が冴えまくる。

「あなたつて本当、何だかんだ言つて優しいのね。そういうところ嫌いじゃないわよ」

「あたしはあなたのそういうところが嫌いなんですけど」

「そもそも、先に二人の世界に入ったのはどっちだったかしら」

「そうよ、先に不参加を表明したのはこっちなのに、人の尻馬に乗って叩くのやめてくれない?」

「ほんつと、見境ないわね澤村さんつて」

「はあ? 言ってる意味わかんない!」

「ちよつとお……勝手に二人の世界に入ってるんじゃないわねえよう」

いつも思うんだけど、この二人、仲が良さすぎる。

もちろん、ある意味で。

「だいたい、なんでよりもよつて、あの霞ヶ丘詩羽がここにいるのよ」

「そもそも私だつてこの生徒なんだからいてもおかしくないでしょ?」

「そういう意味で言ってるんじゃないつてわかつてるくせに」

「そんなに二人きりがよかつたの? なんかわんな変な妄想してた?」

「言つとくけどそんなくだらない心理戦に乗つたりしないからあたし」

「全身突つ張らせておいてその台詞はカッコ悪いわよ澤村さん」

「いつも全力で生きてるだけよ!」



「だからそうやって扉を壊さないの」

「壊れてない！ ちょっと大きな音しただけじゃない！」

「お、おい待てよ！ ちょっと待ってくれ〜！」

そんな俺の断末魔の叫びは、それを凌駕する怒鳴り声と破壊音にかき消された。

あいつら、俺のことを議論しつつ俺を無視して出て行ってしまった。

なんて本末転倒な……

「あ、あ……はああああ〜」

残された俺は、今度こそ盛大にため息をつく。

何しろこれにて、メインヒロインの会話サンプルと、ついでにほんのちよつとのサブヒロインのプロットと全キャラのシナリオと……サービズで演出込みのスク립トを頼むつもりだった俺の野望はあえなく潰えたのだから。

物理的に残ったのは、机の上にしわくちやで広げられたA4サイズの紙一枚と俺の身一つ。

一時間前の企画も気合も希望もあつさり叩き潰され、精神的に残ったのは没案と虚脱と絶望のみ。

どう考えても、もはやこれまでとしか言いようのない状況。

「だからもう、諦めてしまえばいい。勇気ある撤退を決断すればいい。もともと、単なる思いつきから始まった計画だ。そこに人生や生死を懸けた戦いなんてものは存在しない。だから、ただ一言、しようがねえなあつて。けれど……」

「俺の戦いは、まだ始まったばかりだ……」

人間、絶望的な状況に追い込まれたときほど燃えるものだろう。

……キャラクターを絶望的な状況に追い込んで萌えるのはD作家だけだけど、それはまた別の話。

新機軸を目指した企画がこけて、人は集まらず、サークル結成はいきなり暗礁に乗り上げた。

今のこの状況に新しい要素なんかどこにもない。

言ってしまうえば、この状況こそが王道以外の何物でもない。

ありきたりだけど、崩壊からの、復活の物語。

そう、古い物語をひもとくだけで瞬時に五つ以上のタイトルが浮かぶほどありきたりです。けれど、その五つ以上のタイトルは今でも正しく内容を思い出せるほどの名作で。

だから何度繰り返しても、どれだけ使い古しても、いいものはいいもので。

「よしっ！」

拳に力を込めて、もう一度、昨夜の寝る前の気合を取り戻す。

そして俺は、明日からの一人きりの戦いに思いを馳せて……

「残念だったね、みんな協力してくれなくて」

「……ああ、いたんだっけ」

「えっと、そもそもわたしをヒロインにしたゲームを作るんじゃないっけ？」

「悪い悪い、今まで忘れてた」

「うんわかる。本気で忘れてたよね安芸くん」

ついでに悪い、ちよつとだけ訂正。

俺たちの戦いは、まだ始まったばかり、だった……

「いや、だって加藤、あいつらの前で全然存在アピールしないし」

「だってオーラが違うんだもん。二人とも学校中の超有名人だし」

「まあ、それはそうだけど」

「そういえばあの二人、わたしの名前もまるっきり聞かなかったね」

「いやまあ、最初にちらつと一瞥はくれたぞ？ それだけだったけど……」

「でも安芸くんってすごいよね、よりにもよってあの澤村さんや霞ヶ丘先輩と知り合いなんて。しかも結構親しげだったし」

「……………」

今まで忘れ去られていたことにもさほど文句を言わず、まるっきり普通なしゃべりでありきたりな会話を紡ぎ出す。

ビジュアル的には……まあ、見た通り。

一年以上、一緒の学校に通っていたはずなのに、つい一月前までまるっきり印象に残っていないかった同級生。

加藤恵

……うん、印象薄かったの、名前のせいって可能性もあるよな、うん。

「さて、話も終わったしそろそろ帰ろっか？ ちよつと寄りたところあるし」

「……あつさりしてんな、加藤は」

「普通だと思っけど？」

「普通じゃ駄目だろ。お前メインヒロインになるんだぞ？ ギャルゲーの」

「そうそう、ゲームでは名前変えた方がいいよね？ 加藤恵って結構ありきたりだし」

「自分で認めるなよ……」

名作と呼ばれる物語のセオリーをもう一つ思い出した。

それは、どの作品も、今でもすぐ名前とビジュアルが思い出せるほど個性的で魅力的なヒロインが存在するということ。

物語は、キャラクターが立っていれば九割方は勝ったも同然と言われることがある。それってつまり、キャラクターが致命的に立っていなかった場合は……

「閉めるよ？ 鍵」

「……ああ」

いや、だから、戦いはまだ始まったばかりだし！

そう改めて決心すると、また拳に力を込める。

さつきほどの握力を感じないのは多分気のせいに違いない。

何しろこれは俺の……いや、俺こと安芸倫也と加藤恵の、戦いの日々を綴った物語。

この友人Aな同級生をメインヒロインに据えた物語を作り上げるといふ戦いの……

「よいしょと……んく、こんな感じでいいかなあ」

「どした加藤？」

「あ、うん、扉がちよつと壊れちゃってるみたい。直しとかないと」

「……お前もいつか壊す方に回ろうな。その方がキャラが立つ」

## 第一章 フラグつてさ、気づいてあげないと折れてしまうんだ

「おはよ、山口のおじさん」

「お、今度は新聞配達か。倫君精が出るな」

「来月に『皇国のゴライオン』のBDボックスが出るからね！ ねん〇ろいどは初回版にしか付かないからこつちも死にももの狂いよ！」

「……相変わらず爽やかに濃いこと言うなおい。何のことやらさっぱりわかんねえよ」

「んじゃ今度布教に行くからプレイヤードけ用意しといてよ、じゃあねー！」

近所のお馴染みさんと軽い朝の挨拶を交わすと、一気にペダルを踏み込む。

で、そのまま道なりに左に曲がりながらしばらく加速すると、視界が上下左右一気に開ける急勾配の下りにさしかかる。

通称、探偵坂。

行きはオアシスへ、帰りは砂漠へと誘う三〇〇メートルもの心臓破りの坂だ。

なお命名理由は坂の途中にある『坂下興信所』と書かれた古ばけた看板に寄せられた小学生の好奇心だったり。

「うおおお……」

坂の入り口にさしかかった途端、背中からの強い風がさらに俺と自転車を押す。春休みも真ん中を過ぎ、明日から四月という朝の空気はもう冷たくない。ひらひらと舞う道沿いの桜並木の花びらが、余計に暖かさを感じさせる。そんな快適な風に背中を押され、いきなり斜度のきつくなったり下り坂を急加速……

「おおおお……つとおー」

……しかかったところで、今度は全力で両手のレバーを握って急減速。

「歩行者よし、車よし、速度よし……全部よし！」

一時停止と指差呼称。

改めて、車道の脇をゆっくり下りていく。

なにしろ去年あたりから、冗談みたいに自転車への風当たりが強い。

今となつては、もうガキの頃みたいに車と競争したりとか、マシンを倒しながら全速力で角を回ったりとか、そんなスリルとスピードだらけの快感は街中じゃ手に入らない。けど……

「規則は規則だからな、うん」

そういうのを『住みにくい世の中になった』とかおっさんくさく愚痴る気も別れない。

自分はこけてもすつ飛んでも平気だけど、偶然そこに居合わせた人が平気かどうかなんてわからない。

まあ、そんなくらいには大人の階段上ったつてことで。

それに、桜の花びらが舞うのと同じ遅さで走るのも、この季節の楽しみ方にぴったり合つていい感じだ。

「うおお、ひらひらでポカポカで、あつたけえ……」

ブレーキを握る両手以外の力をゆるめて、ぼーっと空を見上げる。

もうすつかり春めいた空は、明るい青に薄い雲の白がたなびき、そこに花びらのピンクが散らされて。

あとは、冬よりも少し力強くなった太陽、夜明けまでに沈みきれず縮んだ月。

それと、その太陽や月よりも大きく、近く、速く視界を通り過ぎていく、まん丸い未確認飛行物体。

「……はいっ？」

太陽や月よりも大きく、近く、速く視界を通り過ぎていく、まん丸い未確認飛行物体

……

「ま、まさか！ あれはひふお……お」

と、疑念の声を上げるよりも早く、その未確認飛行物体は俺の目の前にぼてつと着地すると、そのまま坂道をころころと転がり落ちていった。

もうちょっと滞空時間が長い方が風情があつてよかつただけだな。

「帽子かあ……」

確認済走行物体はどうやら真つ赤な麦わら帽子ではなく白いベレー帽のようだった。

なるほど、未確認飛行物体としては風を受ける面積と強度が足りなかつたから遠くまで飛ばなかつたんだな。

いや、色は関係ないけど。

と、我ながらかなりどうでもいい感慨にふけていると……

「あ、あああああ〜！ お願ひ、ちよつと待つてえええ〜！」

いつの間にか強くなつていた風に乗つて、声が届く。

「え……っ」

その瞬間、俺の体は勝手に反応した。

両手が、筋肉が盛り上がるほどブレーキを思い切り握り、首が、筋が違えるくらい思い切り後ろを向く。

多分それは、坂の上から届いた、綺麗で透き通つて、それでいて強く通る声の主をこの

目で確かめるため……

「わたしの帽子〜〜!!!」

「あ……」

振り返つた坂の上。

そこに立ち尽くしたまま途方に暮れる、俺と同じくらいの年の、一人の女の子。

そして俺の目にまぶしく飛び込む、白いワンピース、白い脚、白い……

いや、色は関係ないけど、多分。

まるで止まる気配もなく坂を器用に転げ落ちる帽子に右手を伸ばし、風にたなびく髪を左手で押さえ、つまりスカートを押さえる手が足らず。

……まあだからそれはともかく、あの帽子の持ち主がそこにいた。

「行つちやつた……あ」

「あ……」

そして彼女が遠くの帽子から視線を近くに戻したとき、必然的にその線上にいた俺と目が合うことになり。

相変わらず困つたような表情で、今度は俺と帽子を交互に見つめることになる。

「ちよつと待つてろ！」

「えっ……？」

その子の視線が何を語っていたかは、俺にはわからなかった。

けれどまあ、今はこの急展開の流れ……ビッグウェーブに乗るしかない。

「うおおおおおっ！」

だから俺は、下り坂に向かって自転車のペダルに思いっきり力を入れ……

「おおおおおおお……つとお、よいしょつと」

そして考え直して、自転車を下りると丁寧ていねいにスタンドを立て……

「改めてうおおおおおとおおとおおおっつ！」

二本の足で全力で駆け下りた。

こうするとスピードも格好良さも落ちるけど仕方ない。

これこそが、この国の交通教則にのっとったまっとうな追いかけ方だ。

全力疾走しつそうだから危険けんげんだけど、徒歩ほふなら多分違反いはん扱いあつかにはならない。

交通弱者ほんやく万歳。

※ ※ ※



その夜……

二四時を過ぎて、いつも通りアニメ録画用HDDレコーダー二台の駆動音がうなりを上げる中、その機器の廃熱にも負けないくらいに熱くキーボードを叩く音が部屋中に響き渡っていた。

タイトル…

未定

作品コンセプト…

出逢いと、想いと、イチャラブの物語

「……最後の『イチャラブ』がバランス悪いかな？」

今朝の、あの『運命』の出逢いであてられたから。

現実にも負けない物語性が、俺の創作意欲に火をつけたから。

……熱さが全身から溢れ出して、テキストに起こさずにはいられなかったから。

「いや、イチャラブ描写を売りにしなくて、なんのためのギャルゲーだよ」

結局、あの帽子は大通りに転げ落ちる十数メートル手前でなんとか救出できた。

坂から半分くらい駆け下りていた彼女は、こつちが『もういいって』とささぎるくらいに感謝して、何度も頭を下げた。

すりむいた肘の痛みがちよつとだけ誇らしく感じた。

プロローグ…

ある春の日に、俺は、運命と出逢った……

穏やかな陽射しが降り注ぎ、暖かな風が通り抜け、桜の花びらが舞う長い坂。

そして、そのてっぺんに佇む一人の女の子。

名前も知らない、会ったこともない女の子。

新たな予感に胸を躍らせる、そんな瞬間……

俺はその時、二度目の恋をした。

そう、また恋をしてしまった。

人を好きになることは、やめられなかった。

たとえ自分が傷つこうとも。たとえ相手を傷つけてでも。

たとえ二人の想いが叶わなくとも……

そうして新学期は、何かが起こりそうな予感とともに始まっていく。



「……ちよつと痛すぎる、か？」  
 それからしばらく、坂の途中とちゆうちゆうに止めてあった自転車まで二人で並んで歩いた。  
 けれどその後、俺は自転車に乗って坂を下り、彼女はそのまま坂を上がってもとの行き  
 先に戻った。

その間、ろくに話もしなかった。

お互いに名前も名乗らなかつたし、何の約束もしなかつた。

「いや、痛いくらいの方がツカミとしてはいいよな。勘違い上等！」

でも、それでいい。

いいや、それがいいんだ。

何しろ、こういった物語は、一度切れてしまったかもしれない縁えんがひよつとしたことで

再び繋つながるそのドラマ性があつてこそ輝かがくんだから。

それこそ、新学期から転校生として自分のクラスに入ってくるとか。

あるいはお互いの父親が敵同士で、愛憎あいぞうの波に翻弄ほんろうされていくことになるとか。

さらに、実は母親が同じ異父兄妹きょうだいだったという衝撃しょうきの事実が判明して泥沼どろぬま化……

……たった数秒でイチャラブとは別次元に行っちゃってるのはさておき、まあそういう

ことだ。

本作のアピールポイント…

初々はつはつしくて、もどかしくて、こつ恥はずかしくて身もだえる。

そんな青春の日々を綴つづった純愛アドベンチャーノベル。

「……今度は痛いを通り越こしておっさんくさいなおい！」

それにしても、この異常なまでのモチベーションはかつてなかつたことだ。

まるで、今まで眠ねむっていた熱さが一気に噴かき出してきたような。

こんなにも自分の気持ち燃え上がるのはいつ以来だろう？

多分、ああ、『恋するメトロノーム』に寝食しんじきを忘れてドハマリした時だから……

「いくらなんでも『青春』はないな。ネタゲーじゃないんだから」

……たった一年前か。

本作のアピールポイント…

初々はつはつしくて、もどかしくて、こつ恥はずかしくて身もだえる。



そんな日常の日々を綴った純愛アドベンチャーノベル。

※ 追記。ここは見直し予定。

「日常の日々って……日常がかぶってるだろおい」

そんな感じで、俺のゲーム企画作りは、HDDレコーダーが全ての番組の録画を終える深夜まで続いた。

……次の日の朝刊は、三〇分遅れで各家庭に届けられることとなった。

この続きは7月20日発売のファンタジア文庫で！

(C)Fumiaki Maruto, Kurehito Misaki